

23 中世都市国家の起源と宗教

24-2 ※中世都市と宗教(1)

文化の所産であつて、假令カトリック教會の下に全歐洲が統一せられとも、之を相續せる歐洲人達には充分に之が消化せられておまかつたものと言ひ得べく、彼等は各、其の文化發展の程度に應じて、自己の力に相當する限度に於て少しづつ、其の遺産を取入れ行つたのである。従つて十字軍の宗教的興奮の中に教會支配の統一文化が出来上つた場合に於ても、その理想と實現せられた文化との間にはかなり大きな距離があつたと云はねばならぬ

一 西洋組合特設



ローマ末期に成立した「カトリック教會」はキリスト教に於て遂にヨーロッパ全体を自己の下に統一したと云い得よう。しかし「キリスト教」は之が思想の精華たる原始キリスト教が古代に表れた凡ゆる文明要素、即ちギリシャ思想、ローマ思想、並に東洋の靈肉對立思想等を吸収し、其等を自己の中に調和して造り上げたものである。従つてそれは極めて「高貴な

カトリック教會

解さるべきであつて、  
 於て十二、三世紀に出来上つたものでないこ  
 とは云ふまでもない。  
 キリスト教の所論によれば、吾々各個人は  
 他の個々の自然物と同様に神がその自由意志  
 を以て創造し給うたものであるから、其等は  
 神から見ればその意志によつて統一せられ、  
 互に或る關係を有してゐるものでありうが、  
 各個物の側から見れば各個に互に獨立し、  
 かも神と對立するものであつて、本来神とは

一 精神學 組合 第四



い。即ち十三世紀のヨーロッパには巨萬の富を  
 共同で相續して未成年者の如きものであつて、  
 後見人としての教會が全遺産を寶庫に保管し、  
 その中から遺児の力量に應ずるだけの財産を  
 小出しに渡し、彼等の成年期に到るを俟つ  
 が如き状態にあつた。吾々は英、独、佛、伊  
 等の各國の青年期乃至は成年期の活動を見む  
 とするものであるが、その前に先づ遺産全体  
 の財産目録に目を通さねばならぬ。以下説  
 くところの中世教會の觀念もこの意味に於て

6

5



状態にある、されば吾々は現に與へらるる  
 素地を如何に発展せしめても神意に叶ふ人格  
 者と<sup>なり</sup>得る<sup>なり</sup>苦の<sup>なり</sup>ものどもを<sup>なり</sup>け<sup>なり</sup>ば、又<sup>なり</sup>及<sup>なり</sup>令  
 吾々の迷の雲が晴れて神意を体して精進せむ  
 とする欲望を感じた場合に於ても、その行為  
 の規範は人間の現狀もしくは宇宙の狀態を觀  
 察するにことによつて得らるるものではない。  
 蓋し自然並に人間は被造物であつて、その自  
 身に於ては価値を有するものではなく、只神  
 の創造の意に因<sup>り</sup>りせしめて、初めて価値を生

一級新製組合製

本質を異にする。尤も被造物の中でも人間の  
 みは神氣を吹き込まれ神靈を受けこゝるから、  
 各個人はその靈に與する限り神と同質なりと  
 考ふべきであるが、しかし乍ら肉の分子は所  
 謂物質であつて、それは神性とは全く異なると  
 のである。況んやこの靈すらもア、カ、エ、ウ、  
 の墮落以來宿罪を負ひ、本来の故郷たる可き  
 神人一教の樂園に復帰せむとの慾望を明白に  
 意識<sup>せ</sup>ず、寧ろ反對に互に獨立して富、地位  
 、榮譽等を奪ひ合ふ。地獄の生活に居るが故<sup>り</sup>に

かしこの場合に於ても吾々の個體は有限なる  
 靈にあり、神意の絶対にして無限なるに比す  
 れば無に均しきものにあつて、結極のところ  
 以て神意を捕捉するには足らぬ。又仮りに  
 何業かの方法によつて規範が與へられし  
 ても（一）一々の十戒の如く（吾々の靈は肉の  
 介子を有してゐるから之を實行し、以て神人  
 合地の樂地に入ることは不可能である。吾々  
 は如何に跪いても焦つても、吾々自身力を  
 以てしては如何ともなし難き地位にある。自

一編 附録 附録

たるものがあるから、行為の規範は被造物の  
 本質よりは導来せられ、神の意志——無より  
 有を生ぜしめ、物の本質の如何にか、はらず  
 自由に之を変化せしめ得る底の不可思議の神  
 意——によつてのみ定めうるべきものである  
 只吾々の靈は神によつて吹き込まれたもので  
 ある、その限りに於て神と同質のものがある  
 から、その中が宿罪より情められ、創造せられ  
 たまひの白起の状態に復帰した場合には此の  
 規範と規範と観得し得るか、如く思はる。し



特別の恩寵を以て吾々に律法を天啓し給う。是によつて吾々は神の要求、即ち吾々の為すべき行為の規範を知り得るのであるが、それがか頗る嚴格な律法であるため、罪ある衆生は之に背及して神の呪を受けねばならぬ。是を以て神の子たるキリストは衆生清度の愛の精神から仮りに人界に下つて人の子となり、説教、奇蹟に依つて聖書並に教會の傳承 (Tradition) に傳はせる神意を天啓したのみならず、その十全の身を犠牲にするこゝによつ

福音書組合特選



由の樂園は徒らに憧れの對象たるに止つて、恐らく吾々は永久に地獄の苦難を嘗むべき憐れな運命を負ふのであらう。この悲しむべき地位を如何にして脱却すべしか、是かパウロ以来個別主義 (Individualism) 的もしくは靈肉對立主義の立場に立ちつゝ、猶且つ神人の合致を求めむとするキリスト教にとつこの中心問題である。中世のキリスト教は之に對して如何なる解決を與へたのであらうか。曰く、幸にして神はその無限の慈悲心から

此所に於し教會なる救済機肉が問題解決の中  
 点に押し出されし来た。然らば教會とは如何  
 なるものか。吾々の靈は先づ教會の洗礼によつてその宿  
 罪を清められ、エバンの花園の昔に歸つて道  
 路に神の支配を受けらる。即ち洗礼なる教會の  
 儀式によつて吾々の靈は如実にキリストの體  
 内に取入れられ、神化の一部となしつゝ、同時  
 にキリストの支配を受けらる。此のキリストの  
 支配に於てある信者の団体——キリストなる一

一 福音組合特設



一 改の解脱に到達す心き道と用き給ふこと。  
 現在を超越して神の前に正しとせられ、神人  
 救はれし見込なき吾々に、此の機肉によつて  
 自力を以てしては到底  
 他方に於ては是れを以て衆生清交の不可思議  
 此の機肉によつて  
 設定し、一才に於て天啓せられし神意を傳承  
 して之を衆生に傳達する機肉となすと同時に、  
 清交機肉 (graden- und Heilanstalt) を  
 は地上に於ける形見として教會なる慈悲機肉  
 此の機肉によつて  
 此の機肉によつて

14

13



歴史の幕が下され、ついで教會の如き造造物  
 もその存在の意義を失小に到つて後に却めて  
 實現せらるゝと考へらるゝべきであるが、此の  
 眞は當時一部の神秘家が向題にしていけれど、  
 中世教會の深く闇に入るところではなかつた。  
 教會の教ふる当面の解脱は、肉の支配を脱して  
 個靈が自滿に神の支配を受けるとである。  
 もとより十全なる意味に於て個靈が肉の支配  
 を脱し、継続的に神と共にあるの境は死後  
 に於てのみ實現せらるゝべきものであるが、

一編の資料組合時原

人格の中に吸収せらるゝ、しかもこの人格によ  
 つて支配せらるゝ、個體——が即ち教會である。  
 此の意味に於て教會は純靈的なるもの、所謂  
 「見えざる教會」(unsichtbare Kirche) とい  
 あり、神の天啓の傳達者にして同時に神の救  
 情への保持者である。斯の如く大なる神靈が  
 小なる個靈を支配する状況も、最終に云へば  
 最終の段階である。窮極の理想、即ち各個  
 の靈がその個別性、有限性を失ひ、眞に絶対  
 靈に合致することは最後の審判によつて世界



No.

現世に於てもなほ神の神恩<sup>恩</sup>籠により、教會の儀式を通じても此の状況が現<sup>現</sup>現せられる。即ち神に對する奉仕をなすべく教會堂に参集し來つて集會が、僧官の支配の下にサクリラメントを交けるその瞬間に、神はその不可思議の力を以て靈を肉の絆<sup>きづな</sup>結から解放し、もしくは肉體を靈化して直接に天國に入らしめるのである。此の意味に於て會堂は神人交通の神聖なる場所、即ち地上に於ける天國として他の各地より區別され、僧官は神人交通の中介者

No.

として神力を配付するの故を以て教會の支配者たるキリストの代官と考へられる。そしてその修道僧は日常神と共にある階級、云はば天國の民として俗人と<sup>區別</sup>せられ、世俗權の支配外に置かれる。又此の意味に於て生者の為には聖餐式、懺悔式、命名式、結婚式その他<sup>あり</sup>の方面にサクリラメントが制定せられ、死者の爲には供養式が行はれる。斯の如くして一般世俗界の信者は教會の儀式を通じて神力によつて天國に入り得るが

一 櫻井 聖書 組合 特 刊

神人由の關係に於て、有限なる被造物の  
 の關係にあるから、之に對する天然は直接に  
 理性と通じし行はれぬ。もとより此の場合に  
 於ても有限なる個人が自ら自身の力によつて  
 之を見出し得るものではなく、又社會の狀態  
 をあるがままに觀察することによつて見出し  
 得るものでもない。之は個人乃至は社會が起  
 然の自然的な天の光の下に觀察せらるゝ瞬間に於  
 て、云はば直觀的に獲得せらるゝのである。  
 従つて自然法自身は一貫した理性、調和ある

一 探治賢組合特選



是一步教會堂と出づればその身は再び靈が肉  
 の中に捕はれたる現世生活に立還り、人と人  
 との間の交際に入る。神は此の世俗生活に對  
 しても、社會規範として自然法を天啓し給う  
 た。この自然法も神の自由意志によつて定め  
 られぬものがあり、従つて神人關係を規定す  
 る神法と同一趣旨のものである。神の欲する  
 とは善、神の憎むところは惡であり、その正  
 不は寧ろ神の意志によつて規定せられぬ  
 なるものがあるが、その規定せらるゝ方面が

以前には単に社會關係の規整としのみ行は  
 うれぬたに、一法の中にギリヤ的なる者へ  
 を取入れ、之と萬も不易の大法、乃至は社會  
 の本性より生じし客觀的秩序と見なす。こ  
 とによつて生じしものである。其れが此所に於  
 ては他の根據、即ち神からの天啓といふ超自  
 然的基礎を得て、教育の中に取入れらるるこ  
 とになつた。のみならず、後にイタリヤに於  
 てギリヤ思想が復活してキリスト教的個別  
 主義の後方に返り、個人の理性の働きは同時

一國の教育組合時報



秩序を必要とするか、それが自然法たる所以  
 は全く神の天然に據るものであり、超自然的  
 基礎を有するものであるから、個人の本性、  
 乃至は社會の現状の觀察から割出して是れを  
 云々することを許さぬ性質のものである。此  
 の自然法は教會の傳承の間に保持せられしめ  
 る。斯の如く自然法が自據に理性を通じて天  
 啓せられるとししことは注意を要する。其れが  
 此  
 もと自然法たる者へは、一二期に於て、

う造管ゆいあつて、所謂「見ゆる教會」(sichtbare Kirche) である。先述の「見よがる教會」がキリストなる個人、乃至は現世に於ては常管によつて具体化せらるゝ如く、又國家が皇帝によつて具体化せらるゝ如く、「見ゆる教會」もまたこれによつて具体化せらるゝ。斯く存へられた教會は信者を中に包含する団体ではなくして、寧ろ之と對を成する支配機關である。恰もローマ法に於て「口」の市民 (populus Romanus) が其の後

福澤組合印刷



に絶対理性の働きとせらるゝに及んで、自然法は天啓法であると同時に合理法としての地位を占めるやうになつた。斯くて自然法は教會の教義と矛盾することもし、その獨立し、その自身社会の事情に應じて發展し得るに到つたが、その淵源は遠く中世にまで溯るものがある。

斯の如き自然法を實現する秩序として神は教會及び國家を建設した。此の意味に於ける教會は國家と並んで信者の世俗生活を支配す

くも律法に及せぬが、天皇は直ちに之を破内  
 ここと其の支配権を奪ふ権限ありとする。更に  
 進んでは信者の集団を直ちに教會と同一視し、  
 信者の集団たる國家は専ら天皇の支配下にあ  
 るべきであり、皇帝は其の委任によつて國務  
 を執行する役人に過かぬとまで論ずるに到つ  
 た。  
 斯の如き制の下に於て各個人は自らの理  
 性を働かせることによつて世俗生活を律し、  
 完全なる徳と榮耀にして社會全体の爲に貢獻す

一 精神教育組合

人によつて具体化せられ、役人の意思即ち  
 ローマ市民の意思となる如く、<sup>1</sup>見ゆる教  
 會の具体化する天皇の意思は即ち教會の意  
 思であり、天皇は現世に於ける神の代官と考  
 へらるる。従つて本来天皇は皇帝と相並んで  
 各、相異れず権限と相異れる方法を以て現世  
 を支配す<sup>2</sup>べきであるにもかゝらず、天皇は  
 靈に属し<sup>3</sup>ては見えざる教會を司り、現世  
 に於ては神の代官であるから、皇帝の上に立つ  
 てその支配権を監督し、皇帝の行為に<sup>4</sup>して爲



子やうに努力することによつて神の前に立ち  
 とせられる條件を備ふべきであるが、斯の如  
 き自力による善行は少くとも直接には神に對  
 する奉仕ではなく、*社会的*もしくは階級  
 (Social) 的に組織せられる社會に對する奉  
 公であり、畢竟内体を具備する個人の徳であ  
 るにすぎない。従つて世俗生活に於て如何に  
 徳を積み、人格を完成しても、單にそれだけ  
 では神人合致の法樂界に進み得るものではない  
 と、人はサウラタントを通じて神の恩寵を受  
 け、その不可思議の力に触れることによつて  
 のみ救済せられるといふ。  
 以上告々は説明の便宜上宗教改革以来の傳  
 習に從つて、中世教會が具備する二方面、即  
 ち「見ざる教會」と「見ゆる教會」とを別  
 りに觀察し来たつたが、之等二方面から一つか  
 らなる一併をなし、両者同一視せらるゝこと  
 には中世教會の特色が存するの如き。中世  
 に於ては神人の關係たる宗教生活と對人  
 關係たる社會生活とはかたがた異しく区別  
 せられ、

一 福音書聯合會

子やうに努力することによつて神の前に立ち  
 とせられる條件を備ふべきであるが、斯の如  
 き自力による善行は少くとも直接には神に對  
 する奉仕ではなく、*社会的*もしくは階級  
 (Social) 的に組織せられる社會に對する奉  
 公であり、畢竟内体を具備する個人の徳であ  
 るにすぎない。従つて世俗生活に於て如何に  
 徳を積み、人格を完成しても、單にそれだけ  
 では神人合致の法樂界に進み得るものではない  
 と、人はサウラタントを通じて神の恩寵を受  
 け、その不可思議の力に触れることによつて  
 のみ救済せられるといふ。  
 以上告々は説明の便宜上宗教改革以来の傳  
 習に從つて、中世教會が具備する二方面、即  
 ち「見ざる教會」と「見ゆる教會」とを別  
 りに觀察し来たつたが、之等二方面から一つか  
 らなる一併をなし、両者同一視せらるゝこと  
 には中世教會の特色が存するの如き。中世  
 に於ては神人の關係たる宗教生活と對人  
 關係たる社會生活とはかたがた異しく区別  
 せられ、



二の難問が解決せらるゝのみならず、中古に  
 於て教會があらゆる方面の文化を支配しそと  
 いか意味も自ら明かになるであらう。  
 キリスト教の根本問題たる神による救済の  
 問題を解決せむとするにあつて、中古が特に  
 教會なる制を言調した動機は、ローマ末期  
 に於てカトリック教の成立を惹起した動機  
 とは全くその趣を異にする。ローマ末期に於  
 て教會制度が發生した所以は、危衰期に入つ  
 た文明圏内の人々が甚の極端に尖鋭化せられ

一級市製組合特製

まる其の各、に對する規範たる天啓も、一に  
 對しては直接なるに及して、他に對しては間  
 接なるものと存へられ居り、就中職業道德  
 以外の善行が神に對する義務に非たして社  
 會に對する奉仕とし存へられぬるに拘  
 らず、獨り教會のみが兩方面を支配する不可  
 分の制がとせらるゝことは一見了解に苦しむ  
 ところである。しかし乍ら前述の如くキリス  
 ト教はローマ人に、つては古代文明の遺  
 産であるといふ事實に思ひを留めれば、  
 00年に



れたる後に、僅かにその附屬物として認めら  
 れるに止まる。之に及して申せば、歐洲人は新  
 興の若々しい市民である。彼等は文明に倦ん  
 だに、一人の如き厭世觀を持たず、寧ろ及對  
 に出來得る限り古代文化を吸收し、之れによ  
 つて現在生活を豊富にして力強く之を享受せ  
 るとした。もし昔の<sup>彼等</sup>の力が足らぬならば、神  
 力の強さを借りて彼等の生活を向上せしめ、  
 其の高めらるる生活の歡樂を死後に於ても<sup>継</sup>  
 續せむとした。彼等が教會の傳統から

一編 演習 組合 時 題



大自己意識を以て萬有に對する自己の位置を  
 決定し、安心立命の地盤を占めんと奮心する  
 に當り、一に於ては文明の過重の重荷を  
 無限の判斷から免れんとし、寂靜の樂地へ  
 遁れ、他に於ては種々なる異質的文化を統  
 一して不動の人生觀を得んとする慾望から、  
 神力を以て設定せらるる教會にその避難所を  
 求めたものである。徒つて教會とは主として  
 「見ゆる教會」であり、「見ゆる教會」は  
 キリスト教がローマ帝國唯一の正教と定めら



したより、<sup>十字軍の戦い</sup> 奮つる超自然的な魔力を<sup>フランシス (Francis of Assisi) の如く</sup> 獲得せむ  
 か為か、<sup>十字軍の戦い</sup> もしくは抑ふ可からざる情動を満足  
 せしめを<sup>カ</sup> 爲に行はゆと<sup>キ</sup> 是は、<sup>キ</sup> 昔々もの  
 である。要するに中世の人々の心は何処ま  
 ても現在生活であり、其の現に行はるゝ制を  
 を<sup>キ</sup> 伸意によつて意味づけ、以て現在生活を向  
 上せしむ可き目標を得むが爲に、<sup>キ</sup> 昔々時代文  
 化の唯一の宝庫と<sup>キ</sup> 教會を<sup>キ</sup> 高揚したも<sup>キ</sup> のに  
 あるから、<sup>キ</sup> 彼等にとつて教會の本質は現世に  
 在ける「見ゆる教會」であつて、「見ざる教

福音書組合時報



靈肉對立の思想を受入れ、<sup>キ</sup> 所以も、<sup>キ</sup> 現世生活  
 の有為轉變を脱して永遠の淨福に入りむが爲  
 いはるく、<sup>キ</sup> 變化多き現世生活を<sup>キ</sup> 与は<sup>キ</sup> 一層増進  
 せむが爲<sup>キ</sup> 以上<sup>キ</sup> の力を有する天使の力を  
 借らむとし<sup>キ</sup> ものである。従つて靈の世界、  
 即ち天使の世界は現在生活かそのまゝ、<sup>キ</sup> 房めら  
 れと理想界あり、<sup>キ</sup> 地獄の世界<sup>キ</sup> 單に罪惡に  
 對する威嚇手段として描き出され、<sup>キ</sup> 極端に醜  
 惡化せられ、<sup>キ</sup> 現世生活に<sup>キ</sup> 在るもの<sup>キ</sup> 同様<sup>キ</sup> に難  
 行甚行 (Carpenter) も<sup>キ</sup> 肉の世界より<sup>キ</sup> 脱出せむと

No.

靈肉の交叉異なる音々の現世生活がその前提  
 たる上下両界から或る程なまで分離せられ、  
 の部分だけが強光に照らされ、云はば平面  
 的に鮮かに描き出されおこす。ゆへに故に現世  
 に於ける天と地との會合、神によつて直接せら  
 る、(國)作とする教會が、他の世俗生活から分離  
 された特別の存在と有するものがあり乍らも、  
 猶且つ世俗生活とも併せ支配すべき造造物と  
 考へられ、是が法皇によつて具体化されると  
 見做されしものであらう。

一 藤野野矢全集

No.



會しは云はば其の如長にすまふ。い。  
 教會の傳統に徒へば「見ざる教會」は只  
 の性質上純靈界の組織であつて、天使、肉の  
 羈絆を脱しと聖者、神によつて正しとせられ  
 た死者の靈等によつて構成せられぬて、こ  
 れが物質界の悪魔の組織たる地獄と相對して  
 存在し、兩者の中間に地上の天国とる教會が  
 あつて天の(國)淡き影を宿し、又音々の(世)の現世生活  
 が靈肉相闘の場面を展開してある。當時に於  
 てはかゝる宇宙構造は明白に意識せられず、

ることに依つて自己の系統の中に取入れ、更に  
 教層の權威を以てその活動範圍を一定の圈  
 内に制限することによつて統一的外觀を示す  
 に到つたものがある。キリスト教は外皮であ  
 つて、文化の推進力はその内実にあると云は  
 ねばならぬ。従つて勤力の根源たる國民の實  
 際生活が向上し、各々の欲する所に従つて  
 自己の力を伸長するに到れば、各國民は主觀  
 的には各自キリスト教の精神を基調として行  
 動してゐると云ふ小意識を持つてゐても、その

一 福音書類合巻圖

斯く見れば十三世紀に完成せるキリスト教、  
 統一文明は歐洲人固有の創造になるものでは  
 なくして、古代文化の遺産であり、キリスト  
 教は當時の實際生活に即して存するところと  
 して、寧ろ上から之を敷うてゐる形であつた  
 所謂キリスト教統一文明なるものはキリスト  
 教の精神が内から発露して家族生活、子弟生  
 活、藝術生活等に顯れたものでけなく、  
 其の起源を有する各種の制度を外からキリスト  
 教の教義を以て説明し、其等に意味を附与す



目的を以て努力しても、出来上つた作物には  
 相場の差が生じて来る。斯の如き文化の分岐  
 は本来各国民の人生観の相違に基くものであ  
 つて、各自の発展が異なるにつれて夫々、独自  
 の様式を採つて分離すべき性質のものである  
 キリスト教文化の中には既述の如くギリシア  
 ・ローマ・ユダヤ・ペルシヤ等の諸要素を取  
 入れうれしめるが、欧州各国民は各、自己の  
 性質に適した要素を消化吸収して自らを形成  
 して行つたものと言ひ得よう。其の極まる所

一 西洋文明の発展

結果は夫々の個性に應じて異なることは當然の  
 こと、云ひ得べく、其間に自ら文明の分岐が  
 興り、統一文明は互解する運命にあつた。  
 欧州諸国民は十三世紀當時に於ては未だ古代  
 文明を充分に消化する力なく、彼等の理想と  
 現実との間には大きな距離が存在してゐた。  
 此の距離を短縮すべく教皇の監督の下に古代  
 諸文化を吸収することになり、そのが十四、  
 五世紀の仕事であるが、其の勞作の間には各  
 国民の特性が自ら顕れ、同じ材料を用ひ、同じ



のと見て、十六世紀を以て新時代の初まりと  
 見る傳習的な、しかし心しい感覚に基く時代  
 分けを破棄せねばならぬであらう。何と云わ  
 ば西文化運動の起原は遠く十三世紀<sup>まで</sup>溯り得  
 るからである。之に對して國民史の立場を採  
 る者々は、文艺复兴、宗教改革の流を十三  
 、四世紀まで跡附け得る事實と認めつゝも、  
 猶且つそれの完成し、中世教会からの独立を  
 完全に自覺せる十六世紀を以て近世史の幕が  
 叩つて<sup>幕</sup>落さしめたと見得るのである。爾後

遂に十六世紀に到つて之等支流の人生觀が完  
 全に自覺せられ、其の母体たる教会がその包  
 有する各種の文化を統一し得ざる所以が意識  
 せられざる瞬間に於て、其等は母体より分離  
 するに到つたのである。  
 さすれば近世文化の最初の顔面と見らるゝ文  
 芸復興並に宗教改革を、その運動の支持者と  
 する伊、英、独、佛等の諸國民から引離してそ  
 の自身独立せる歴史的形態と見ようとする歴  
 史家は、近世文化を十三世紀頃より初まるも

の根本思想は所謂及宗教改革 (Reformation) によつて更新せられ、多少その内容に変更が生じたにしても、之を明かにすることは兼ねてその影響を最も深く且つ強く受けしフランスの國民性を考察せしむる所以であると思ふが故である。

中世教會を古代末期のそれと對比する時若しく者々の注意を引くことは、後者に於て自己を殺して寂靜を求むる爲に用ひられし處肉

一 福音書組合 謹製

の発展は文藝復興の本流はイタリヤに、宗教改革の本流は <sup>英名</sup> ~~カ~~ 及びドイツに、中世教會のそれはフランスに貫流し、而して十六、十七世紀の間に之等、清流が互に融合し、かく二十八世紀に到つて各國民は各、その特色を保持しつつ、啓蒙時代の世界文化が成立したものと見る。吾々は其間の経過を <sup>キリスト教改革の中心として</sup> 踏附けむとするものがあるが、茲に前に述べた中世教會の特色を凝視しその思想構成の原理を捕捉する企ことをなさねばならぬ。蓋しカトリック教



No.



對立の思想が、前者に於ては全く反對に自己  
 を<sup>生</sup>活かすてか爲に活用せらゆしめる点にあり  
 又、この活動的を基調に於て中世教會は原始キ  
 リスト教の昔に歸つたものと云ひ得よう。こ  
 れし乍らキリストの説いた救済は純主觀的を  
 ものじあり、各個人が神を信じ、愛の精液を  
 以て隣人に對し、互に知らねば、其所に個人  
 の安心を得らゆると同時に、之によつて天玉  
 は地上に建設せらゆるといふに上るものであ  
 つて、其所に成ることは天國の客觀的構成の如

No.

きは吾人の知り得ざるもの、吾人々の安心立  
 命には無関係なるものとして捨て、顧みられ  
 なかつた。原始キリスト教の理想は知識に生  
 ぢずして行為に生きむとするにある。之に及  
 ばぬ中世教會の要求するところは、古く末期  
 の教會の如く客觀的と神人合致の境地を求め  
 ると同時に、原始キリスト教の如く主觀的に  
 行為<sup>に</sup>生きむとする。即ち客觀的解脱と同時に  
 主觀的解脱を求め、行為に生きむと同時に  
 之を知識によつて基礎付けむとした。

一 精神教育組合 第四

主観的に自己を生かすと同時に客観的に神  
 人の合致が可能なる為には、先づ個体<sup>を包擁</sup>  
 する宇宙の本質を捉へ、次に本質を活動的  
 なものと考へて、個<sup>の</sup>ものはそれより流出  
 (emanation) するものとなるさねばならぬ  
 あり。個体は宇宙の本質より出で、その活  
 動によつて再びその本質の中に還歸するとな  
 すことによつて、初めて行為主義と主知主義  
 とが融合せらるゝと思ふ。此<sup>の</sup>注文に向つて  
 作らねばかゝる如く<sup>近</sup>に存しとものはたつた



トニ主義の哲学であつた。新プラトニ主義が  
 永く中世神学に多大の影響を及ぼしてゐるこ  
 とは故なくしてない。  
 他方ユダヤ思想を以てその根幹とするキリ  
 スト教は、その本来の傾向が意志主義、個別  
 主義的であつて及主知主義なるにも拘らず、  
 概知識本位のキリヤ哲学の中に吸収する用  
 意があつた。エホバの神は被造物と全くその  
 本質を異にし、之と對立する人格であり、従  
 つて個体は神から思辨によつて導出すること



は本来不可純なものである。しかし乍ら工本  
 心の神は無限に偉大なるものである。之に比  
 ずれば被造物なる個体は無に等しさものである  
 るから、之によつて工本や思想は各個の個体  
 の実在性を認めつゝも、神との対比上は等  
 性を無なるものと見做し、個別主義を脱却する  
 ことを得るのである。之を新プラトン主義の  
 思想、即ち個別主義に立脚したる普遍なるも  
 の、存在を認め、それより個体が発出するこ  
 とを思想と比較すれば、相去ること一糸の如



まじ進み得ることか明かになると思ふ。此の  
 関係からキリスト教はギリヤ哲学から発展  
 せる絶対者についての思辨、並にギリヤ思  
 想の洗禮を受けられたローマ壇の考へを取入れ、  
 而かも之を天啓と観ずることによつて其の絶  
 對性を基礎付け得るのみならず、工本や風の  
 神の本質は不可知なりと云ふ考へを取入れ、  
 神の本質そのものに對する認識を放棄し、之  
 に對して此の世に啓はされし限りの神の命令  
 を神の意志と見做して、之を云はばこの本質

から切離して考へた。斯くしてギリヤ哲學に於ては静止せる物としていふは、動いてなる力としていふは、とに不同、實在と考へらるは、亦た異なる。實に、實に引離され、而かも創造的なる働きを自ら——即ち意思——と見做すことによつて、本來實在に關する体系とするギリヤ哲學を目的論的体系的建設に利用した。

神の意思は自然を超越して安んずるもの、即ち實在に關する思辨、自然の觀察等々を以て

こゝは打破すべからざるものである。此の真加カトリック教の著しく原始キリスト教と異なるところである。原始キリスト教に於ては、さへ、これらる事實、制度等は凡そ神意に出づるもの、従つて存在理由あるものとして之を寛容せらるに及し、カトリック教に於ては其等は神の意思に則つて改造せらるべきものとしてその教義を以て積極的に事實、制度を強制せむとする。此の信仰が夫の不可思議なる天の光、乃至は自然の光 (lumen naturale) の光

自然の光によつて観得せらるる  
 教義は實在と超之る當否を  
 あり、現實に對して強制的な  
 規範となるべきものである

への根本であつて、自然の光によつて観得せ  
 られる信念は教義として永く教養によつて傳  
 承せられるのである。此の信仰あつて初めて  
 事情の如何に拘らず教義に従つて突進する勇  
 猛心、教義の命ずるところ革命の血を流すこ  
 とすらも辞せざる野豬的勇氣が基礎附けられ  
 ると共に、其の反面には教義が固定して世の  
 進運に伴ひ得ざる弱味をも持つてゐる所以が  
 理解せられる。地球が迴轉するといふ事實を  
 認めつゝも、ソルケル、カール、ガール、

*Giordano Bruno* を焚殺せぬはさうなかつ  
 るといふ悲喜劇は、斯の如き教義に對する盲  
 信より生じものである。  
 此の弱點を或る程度で補整するものは、  
 一法から取入れられた制度、即ちローマ法  
 皇なる個人の意思・行為、それか自ちに教養  
 全体の意思・行為であるとする制度である。  
 元来ローマ思想の基礎は神々やのそれと同様  
 に個別主義である。實在するものは動いてゐる意  
 思の單位と見らるる個人だけであつて、其

原野館組合啓

の法律の如きもヤリヤ人に於けるか如く  
 在と考へらるる國民の客觀的秩序はよく  
 個人が各、其の力を以て自己の支配領域を擴  
 張せむとする争ひの間に押合ひの結果自然に  
 落ち付いて出来上つて平衡の地位に過おぬと  
 見る位であらう、其の法規の主体として想  
 定されし「ローマ市民」なる法人も各市民を  
 包含する團體に非ざりて、何処までも各市民  
 と離れ、之對立し<sup>存在し</sup>てゐる。ローマの共和利時  
 代に於てすら、少くとも法律の見解に於ては、

民會の如き市民の集會も獨立した意思の主体  
 となり得ざるもの、従つて「ローマ市民」を  
 得ざる性質のものとならぬ、ローマ  
 市民は只合法的に撰定せらるる個人たる役人  
 によつて具体化せられ、此の役人の合法的  
 行為、<sup>を</sup>其中加やかて市民の行為である、  
 此の役人 (Factor) の力が、動もす中は固定  
 して時勢に後れ勝ちの法律を動かして膠着の  
 恐れなきらしめたることは周知の事實である。  
 此の制度が發展して帝政時代には皇帝たる個

一 政治學組合特選

人が帝國を具体化する事、より、更に<sup>之が</sup>スト  
 P 哲學の<sup>所謂</sup>哲人の理想に依つて基礎づけられる  
 やうになつてからは稍、其の性質を變じ、皇  
 帝なる個人が個<sup>の</sup>のローマ人を支配するとい  
 ふよりは、皇帝なる觀念がローマ帝國、即ち  
 あるゆる個人を包含しと團體を支配する事  
 になつた。此のザリヤ化せられたローマ制  
 度は既に古代に於て教會に取入れられ、所謂  
 僧正のあると二了其所に教會ありとせられた  
 か、九世紀以來法皇がローマ法を復活して教



會法を定め、之を基礎として皇帝に對して其  
 の獨立性を主張し、進んでは皇帝をも支配す  
 る權利あることを主張するに及び、此の制度  
 が著しく高揚せられた法皇は教會を具体化す  
 ることとなり、その中が再び法理<sup>上</sup>の性質  
 を變じて、法皇なる個人にもあらず、法皇な  
 る實在觀念にもあらず、神に依つて設定せら  
 れた法皇の位が教會、即ち信者を支配するこ  
 とにして<sup>之を</sup>全作の系統の中に取り入れられた  
 其の結果事実上は個人たる法皇によつて教會

一種の聖職令特製

へらゆら靈、即ち「白蛇の光」に絶対の權威を認め、之に内容ある規範を創造する力ありと信じたこと、及び團體が個人によつて具体化せらるゝ制度とに存するとするならば、吾々カテカート (~~Secularists~~) 以後のキリスト教と想ふ時、ルイ十四世の「朕は即國也」を想ふ時、乃至はケネーの確信 (Providence) の概念を思ひ浮べ、其の經濟表 (Tableau Economique) が事實を超越した規範であつて、國王の施設に依つてのみ實現せらるゝとの

經濟學組合誌



の意思が具体化せうや、斯くて時勢の必要に應じてせしむ、教義を廢止せしめ、乃至は教儀そのものを變更しないまでも、少くとも何れ、教儀の重きを置くかといふ場合には、時代の要求を容ゆるだけの餘裕加之によつて教會内に發生したのである。後にカトリック教が文藝復興的傾向と結び得た主因は、并惟ふは此所に存するの故である。カトリック教の特徴が、果して吾々の見た如くに、實在 <sup>から</sup> 引離 さ せ ら れ ば 働 き は 中 身 と 存

主張を聞く時、吾々は佛國民の存へ方とカト  
 リック教のそとの間に一脈の相通するもの  
 あるを見逃す譯には行かない。親に惟小に  
 カトリック教の此の特徵を以て直ちにフラン  
 スの國民的傾向（國民性）と見ることは不當  
 であらうが、宗教改革のカルヴァンを説く時、  
 吾々は再び此の問題に歸つて来る。